

御伝鈔(その11)

親鸞聖人のひ孫である覚如上人が、親鸞没後33年に親鸞聖人の御遺徳を讃えた『報恩講私記』を著わされました。続いてその翌年、親鸞聖人の伝記絵『親鸞伝絵』を著わされ、詞書(ことばがき)の部分だけを『御伝鈔』(上巻・八段、下巻・七段)といいます。

第四軸・第一図「箱根霊告」

親鸞聖人が箱根権現の翁の饗応(きょうおう)を受けられるところが描かれています。(右半分)
<饗応:ごちそうする。酒食を用意して人をもてなす。>



第四軸・第二図「熊野霊告」

仁治元年2月、京都五条西洞院の御坊に親鸞聖人が住んでいた頃、大部の平太郎が、熊野権現参詣の途中に立ち寄り、教えをうけているところが描かれています。(左半分)



第四軸・第三図「熊野霊告」

熊野権現に参詣した平太郎が、社殿でうたた寝している中で霊夢を感じているところが描かれています。



住職レター

お寺の鐘(梵鐘)の、ゴーンという音、最近、聴かれましたか? 町の方では、音がうるさく、鐘を撞くと苦情がくるのだとか…。
その昔、私の祖母は、「御恩の鐘の音…」と言っておりました。ゴーンと御恩を掛けていたのですね。
それだけ、有り難いという思いを、私に伝えたかったのだと思います。

一般的には、鐘楼(しょうろう)と言われ、寺の境内にあり梵鐘を吊し、時を告げる施設でした。門徒さんは、親しみを込めて、鐘つき堂と呼ばれます。

時計の普及していない昔は、寺の鐘が時を告げておりました。三十年くらい前まで、善教寺でも朝六時と夕方五時に、鐘を撞いていたよう

ですが、今では法座の開式三十分前と除夜の鐘撞きだけであります。せつかくの「御恩の鐘の音…」が、おとなしくなり(音なし)…、なんだか寂しいです。

大晦日の午後十一時四十五分より、除夜の鐘を撞きますので、「御恩の鐘の音…」を、一緒に味わいましょう。

ちなみに、撞く回数の由来ですが、人間の煩惱の数が百八であるとか、四苦八苦(つまり四×九(四苦)と八×九(八苦)を足して百八になることから、四苦八苦を取り除くという意味があるようです。

【写真】善教寺の鐘楼堂(一七四一年建立)

